

よい語りわるい語り 児童館はむずかしい

ものがたりの会もやりやすい順番がある。

一番やりやすいのはホールで有料の場合。

有料の場は、お金を払ってもそれを聞きたいという

目的を持った人が来るところだ。

見る気満々、聞く気満々。

最初から場の空気ができあがっていて、ステージに出ただけで

客の笑顔と拍手に迎えられ、スーッと話に入れる。

寄席も歌舞伎もそういう人たちを大勢抱えているから成立している。

次に図書館でする場合。

ふつう有料ではないが、

こちらもものがたりを聞きたい人、本が好きな人が集まってくるから

「静かにしてください」と言わなくとも、静かに始められる。

「静かに」と言っても命令されて氷のように静かになるのではなく

ものがたりを聞く場では静かにしている方が楽しいことがわかっている人の集まりなので、

なごやかに静かになる。

ついで小学校。

小さめの教室と体育館でだいぶ違うが

よくも悪くも学校が作ってきた「聞く文化」というものがあって、

子どもたちは朝礼だの入学式だの、大勢で話を聞く習慣を持っている。

だから本好きもそうでない子もいろいろいるが、とりあえず

最初静かにすわって、ぼくのことばを待つ態勢を作ってくれる。

で、最初を聞いてさえくれれば、あとはこちらの力次第で

船をこぎ出すことができる。

で、たまに児童館や学童クラブで頼まれることがある。

学童や児童館はマンネリにならないようにと、

ときどき、なにかのイベントを作ろうとする。

で、たまたまぼくのことを知って、子どもだから、お話しならいいのではないか、

と声をかけてくれるのだ。

だが、これがよさそうで、なかなかむずかしい。

もちろん、できることはできる。

ただ、それでみんなが満足いく結果をだすためには
いろいろ気を配らねばならない点が多いという意味でむずかしいのだ。

児童館も学童クラブももちろん子どもがいる場だ。
だが、その子どもたちは別にものがたりを聞きたくてそこにいるわけではない。
帰るべき時間が来るまでいなければならないから、いるのだ。
そこにこちらが落下傘で舞い降りて、話をする。

しかし、学校のような聞く文化はないし、
うるさい子がいたとしても、スタッフの注意のしかたに学校のような強さはない。
なるべく、子どもたちの自由を尊重したいからと、
聞く気のない子が同じ部屋で別の遊びをしても容認される。
ぼくとしては、ぼくが語り、聞いている子もいる同じ部屋で
漫画を読んでいる子がいると、ほんとうに話がしにくい。

それでも、児童館の職員がぼくの
ものがたりライブをどこかで聞き、自分の館の子どもたちにも
聞いてほしいと思って呼んでくれる場合はまだいい。

そのスタッフが事前に子どもたちに宣伝してもらってあげてくれるし、
なるべく大勢の子を集めようとする。

ぼくもそのスタッフの期待に応えたいと思うからがんばる。

だが、たとえば「学校で日中やった後、時間がまだあるので
夕方に児童館でもやってほしい」と、役場から
行きがけの駄賃風に頼まれたりすると、少し意味が違ってくる。

現場の児童館のスタッフに、とくにこの会に思い入れがあるわけではないからだ。

以前、こんなことがあった。

夏休みのある日、児童館でもものがたりライブをさせてもらうことになった。
これは地元の子どもに関するボランティア団体が、子どもにお話のプレゼント
という意味合いで、ぼくを呼んでくれたのだ。

一番広い部屋で1年生から4年生まで40～50人くらいの子が集まった。
時間は60分の約束になっている。

児童館ではふだん、話など聞いたことのない子もまじるので
ぼくの方も用心して参加型のことば遊びやゲームをたくさん入れ、
話の方も短めのをいくつかつなげ、目先を変えるようにする。

笑い話とおぼけ話はわかりやすいし、子どもたちが好きなので多用する。

で、後半に短いおばけ話を始めた。

少しづつこわい雰囲気になって行く。

「もうすぐ、なにか起こりそうぞ」と子どもたちが固唾を飲む。

…はずだった。

ところが、部屋の一番後ろの(厳密にいうと別の部屋なのだが

ふすまをあけて広くつかっている)コーナーで、数人の子がこちらの会に関係なく床でおもちゃで遊んでいた。

そして、そのおもちゃのひとつから急に電子音の音楽が流れだしたのだ。

語りを続けながら、驚いてそっちを見る。

だが、その子の横には大人がすわっているのに

平然としてそれをやめさせる気配がない。

そのうちにぼくの話は少しづつクライマックスに近づいていくのだが、無遠慮な電子音はピロピロとずっと会場に流れつづける。

で、ぼくはものがたりの海にみんなをつれだす船長だから

船の運航にさしつかえるものはなんとかする義務があると思っている。

だから、なんとかしたいのだが、

これが笑い話なら途中で切って「すみません。その音をちょっと

とめてもらえませんか？」と頼める。それですぐに話に戻れる。

だが、おばけ話は雰囲気を楽しむもので、せつかくここまで作ってきた空気をこわしたくない。

なんとか、ほかの大人たちにこの状況をなんとかしてもらいたい。

と、思っていたら、うしろにいたボランティアの一人がさすがに立って、

しきりの戸をしめようとしたり、遊んでいる子をつれだそうとしたり

働きかけるが、どうもうまくいかない。

音は鳴りつづける。

もうだめだ。ぼくはしゃべりながら、話と無関係の大きなジェスチャーで「なんとかしてくれ」と合図を後ろの大人たちに何度も送る。

そのジェスチャーに気付いた会場の子どもたちがいっせいに後ろをふりかえる。

で、結局、ぼくの話は切れなかったが、みんなの気持ちはそっちに行ってしまうだろう。

ようやくのことで、部屋が静かになり、ぼくはとにかく話し終えた。

ところが、おひらきとなって子どもたちもひきあげたあと、

そのボランティアが児童館の年配の女性の館長からおこられたのだ。

部屋のしきりを勝手にしめようとしたのがいけなかったらしい。

「そういうことをするなら、今後、建物をお貸しできません」と言われたというのだ。
ええ？ しきりの戸は、こういうときのためにあるのでは？

で、ぼくはわかっていなかったから、ボランティアのみんなの対応がどうして遅いんだと不思議に思っていたのだが、その音の出るおもちゃで遊ぶ子の横にすわっていたのはこの児童館の指導員だったのだ。

で、当の児童館の職員がなにもしないのに、外部の人間である自分たちが子どもをつれだしたり、遊びをやめさせたりするのは…と、ボランティアグループのみんなが気おくれしてしまったのが、ことの手当てが遅れる原因だったのだ。

で、児童館がなぜ、そう考えるかと言うと、ここに来た子どもたちには自由にやりたいことをさせてあげたいというのだ。

それは確かに音の出るおもちゃで遊びたい子にも権利はある。

でもなあ…それは、ただその子が社会的に無知なだけでしょと思う。
コンサートや芝居の場でケイタイの着信音が鳴ってしまったら、その後、急いで切るものだろう。

そうしないと、まわりの人の幸福な時間を奪ってしまう。

それは本人のケイタイを使う自由とはべつものだ。

そういうことも教えてあげるのが指導員と言うか、大人の役割だと思う。

ぼくとて、「そのおもちゃで遊ぶな」などという気は毛頭ない。

話を始める前に隠しておけばよかったとも思わない。

たまたま鳴ってしまったのはしかたない。

だが、そのあとがいけない。

その場には音のしないおもちゃやら絵本がいくらでもあったし、

せいぜい、あと5分か10分の間、そのおもちゃだけひかえてもらえればよかった。

でなければ別室に持って行って遊んでくれてもよかった。

そのことを指導員が言い、その上でせっかくだから

「ほら、向こうでおもしろいお話してるわよ。

いっしょに聞きましょう」くらいの声掛けをしてもらえたらありがたかった。

で、ぼくにも言い分はあるのだが、この児童館と

「ここを会場として使わせてほしい」と頼んだボランティアグループの
関係がよくわからない。

ぼくは旅の人間だから、ここで児童館の館長とけんかをして

「もう二度と来ません」と尻をまくることもできるが、

それで地元のボランティアグループが今後、この会場を使いにくく
なってしまったら悪い。

だから、口ごもってしまう。

こちらのさまざまな思いがこの館長さんにはまったく
伝わらないまま、「許可も得ず、勝手にしきりの戸をしめようとしたりする
自分勝手なグループが来た」と思われて終わるのかと思うと、腹もたつが
しかたがない。

で、ぼくの方にも大きな反省がある。

ぼくは「大人と子どもがいっしょにものがたりを聞く場がたくさんあるいいです」と
いえば、大人たちはみな「そうですね」と賛成してくれ、

また、協力してくれるといつのまにか思い込んでいたようだ。

実際、そのキャッチフレーズさえ言えば反対する人はいないだろう。

だが、いざ現場に行けば、子どもがらみの場所でも関係者の温度差はとともある。

そして、どこでするにしろ、一人ではうまく行かない。

だとしたら会場に少しでも早く行って

うちあわせもかねて、雑談をし、こちらの意向を知ってもらい、

できればぼくのことを「こいつは悪い奴じゃなさそうだ」と思ってもらいたい。

そうやって事前に温度差の解消につとめることをしなければいけなかったのだ。

で、さらに「できたら会場の管理者のみなさんも会場で話を聞いてくださいとお願いし、
子どもといっしょに笑ったりこわがったりしてもらえるようつとめるのだ。

それで、また、こういう企画をやりたいと思うようになってもらえたら、

子どもたちにとっても、ものがたり世界にとってもよかったねということだ。